

あとがき

第二回が実現した。参加者が増え、密室の会議を脱出し、研究会そのものであったが、ディスカッションの焦点が散逸しすぎていた、というのが私の印象であった。この反省から、第三回のテーマ設定や進行方法について、形井教授とディスカッションを重ねてきたが、社会鍼灸学の領域や本研究会の目的という根源的な問題が常に横たわっているので、一定の方向に収斂するには時間を要した。

私的なことで恐縮だが、今年度、首都大学東京都市環境科学研究科都市システム科学専攻という一言では表現し難い学際的なフィールドで、社会学的な鍼灸研究を受け入れていただいた。講義などを通じた印象は、社会から求められている「生きた研究」を教授陣が自信と余裕を持って実践しているということであった。これは、幸いにも研究環境の優れた大学院で学ぶ機会を得た結果であるかもしれない。私は、これまでも鍼灸関連の学会や大学で研究を行ってきたわけだが、鍼灸研究と社会との繋がりや社会からのニーズを顧みて複雑な心境になったというのが本音である。5年程前に、とある鍼灸研究者が学会誌で鍼灸研究の裾野の広がりの必要性を説いていたが、その真意をまさに身をもって体験することになった。

まだ、私には本研究会の確固たる方向性は見えてこない。しかし、社会鍼灸学の存在意義やニーズは、研究を重ねながら少しずつ見え隠れし始めている。

ここで、改めて当日オブザーバーで出席され、参考になる意見を頂いた諸先生方に感謝を申し上げます。また、今回も、事前準備から当日の接待まで協力してくれた、筑波技術大学附属東西医学統合医療センターの研修生の皆さん、ありがとうございました。

第3回の研究会（2008,7/27）が迫った7月初旬、北海道洞爺湖サミットの開催で騒々しい日本、曇天の続く船橋で。

箕輪 政博